

僕はアスペルガー症候群です。後輩から打ち明けられた高校生が、この障害をテーマにしたラジオドキュメンタリー作品を作った。どんな障害なのか。どう接すればいいのか。当事者や家族に話を聴き、深刻な悩みを訴えに触れた。作品では「障害は個性の一つ」とし、特別視せず、配慮しあうことの大切さを伝えている。

(太田康夫)

三重の高校生ドキュメンタリー制作

作品名は「アスペと僕ら」。日生学園第一高校(三重県伊賀市)放送部3年生の滑川弘樹さんが主に企画や取材を担当、2年生の冷牟田将吾さんがサポートした。

きっかけは昨年9月。部長だった滑川さんは、コンクールへの出品作のテーマをみんなと一緒に考えていた。新聞をめぐっていた滑川さんの目にある記事がとまった。アスペルガー症候群の女兒に関する記事で、女兒は大きな音を聞いた際にパニックになると書いてあった。「障害があるから仕方ないだろう。何げなく言った。部活終了後、残った後輩の一人が話しかけてきた。「僕もアスペルガー症候群です。障害があるから仕方ない」という言われ方は嫌です」

後輩は、数年前に診断を受けたが、障害を明かしたことはなかった。「先輩なら正しく理解してくれると思った」

滑川さんは突然のことに驚くと同時に、身近な問題であることを知り、「アスペルガーって何?」「どう接したらいいの?」と疑問がわいた。掘り下げ、ドキュメンタリー番組にしたいと思った。

下調べをするうちに、成人の当事者や家族ら約10人から話を聴く機会があった。複数の指示に対応できず、会話を辞めざるを得なくなった20代の男性は「死にたいと思った」。ある女性は「中学の

後輩の告白きっかけ「障害知って」

アスペルガー症候群「コミュニケーションや想像力に困難を抱える」「広汎性発達障害」のうち、知的に遅れがないものをアスペルガー症候群や高機能自閉症と呼ぶ。先天性の脳の機能障害とされる。柔軟な対応が苦手で、特定のこと執着することもある。

ころ、歩き方が分からなくなった」と話した。「息子が子どものころ、学校でよく暴れ、手がつけられず神経をすり減らした」と教えてくれた母親もいた。

校内でも40人ほどにインタビューを重ねた。「うまく接していけるか分からない」「避けてしまおうと思う」という反応があった。自らアスペルガー症候群だと名乗り出た生徒も数人いた。彼らは「普通に接してくればそれでいい」と訴えた。

最初は滑川さんを手伝う程度だった冷牟田さんも、色々と考えるようになった。「アスペルガー症候群でも、深刻に悩む人もいれば、そうでない人もいる。周囲の理解不足で追い込まれないよう、みんなに障害を知って欲しい」

インタビューをつなぐ作品の最後で、滑川さんと後輩のやりとりがある。

滑川「僕ももう、彼と普通に話せる。発達障害の一つって言ったけど、個性の一つと言った方がいいかも」

後輩「アスペルガー症候群だからって接せられるのはいや。みんなと同じように。特徴ですから」

「アスペと僕ら」はNHK杯全国高校放送コンテスト三重県大会のラジオドキュメント部門の最優秀賞に選ばれ、東京で開かれた全国大会で24日、参加179作品中、入選(10作品)した。